HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	江戸時代におけるツルの生息実態および人との関わり［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	久井, 貴世
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12068号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61687
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Atsuyo_Hisai_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：久井　貴世

審査委員　主査　教　授　佐々木　亨
副査　特任教授　津曲　敏郎
副査　准教授　谷本　晃久

学位論文題名

江戸時代におけるツルの生息実態および人との関わり

本論文は、ツルに関する歴史的な情報を収集し、現代の保護活動に資することを最終的な目標に据え、その基礎的研究として、これまで研究対象とされてこなかったツルの歴史的・文化的な観点から、江戸時代の日本におけるツルの分布と季節移動の解明、さらに当時のツルと人との関わりを明らかにすることを目的としている。

本論文の研究成果は、次の 3 つである。

1 つめは、ツルの歴史的分布と季節移動に関する研究成果である。諸国産物帳を用いて行われた従来の研究では、中部地方ではツルの分布に関する情報が得られないとされていたが、幕府や諸藩の文書や記録、地誌、紀行などの各種史料を用いて、江戸時代のツルの分布を詳細に復元した結果、中部地方にも多数のツルが渡来していた事実を明らかにし、ツルの分布の広域性を明らかにした。特に、現在 2 箇所しか渡来地がない西日本では、少なくとも 8 箇所の渡来地が存在したことを確認した。また、江戸時代のツルによる季節移動の様式は、大きく「北日本–東日本系統」と「朝鮮半島–西日本系統」に分類できるとし、特に後者の系統では、筑前国直方平野と播磨国播磨平野が大規模な中継地として機能していたことや、現代とは異なり移動の範囲が広く、九州だけでなく中国・四国・関西地方も季節移動の範囲に含まれていたことを推測した。

2 つめは、博物誌における研究成果である。「鶴」、「丹頂」など 13 の名称について、江戸時代の史料上に記載されたツルと現在の分類学上の種との対応を明らかにした。一方、史料による分類の混乱や揺らぎ、地域差などがみられることを確認した。また、江戸時代において、ツルとコウノトリは「松上鶴」の誤認を根拠として両種は混同されていたと言われてきた。しかし、史料に立ち返って検証すると、近世博物誌の叙述においてツルとコウノトリを混同していた単純な実態は確認できず、多くの場合、明確に区分されていたことを指摘した。さらに、これまで実態が極めて曖昧であるため「実体のない種」として捉えられてきた「薄墨鶴」であったが、実際に捕獲した事例を複数確認できたため、この種は、当時の日本に渡来していたツルの一種であると推測されることなど、近世博物誌の自然科学的考証水準に再評価を促す新たな知見を加えた。

3 つめは、日本史学および日本民俗学における研究成果である。すなわち、1 つめの研究成果で述べたようなツルの歴史的分布と季節移動の背景として、江戸時代の日本におけるツルの渡来は、自然と対立しない形での当時の開発や伝統的な農業、さらに社会

的な仕組みによって維持されてきたことを指摘した点である。具体的には、①領主に独占されるツルは権威の象徴であり、朝幕関係や幕藩関係において機能した鳥類の贈答儀礼を維持するために行われてきた保護であるが、これが結果としてツルの種の保全に寄与したこと、②野生のツルへの餌付けなど、人に馴れさせるような飼い方の実態があったこと、③その一方で、鷹場付近の農村では生業や日常生活上の規制や農業被害があったこと、④藩によって猟師など百姓身分の者や藩士にツルを「捕獲する」権利を与えていたことなどを確認した。また、干潟干拓を主とする西日本の新田開発は、ツルの生息環境にとって悪影響とはならず、むしろ渡来地の拡大につながった可能性を示唆し、新田開発とツルの生息は対立するものではなかったことを指摘した。

なお、本論文の一部はすでに査読付雑誌論文5本として公刊されている。また、申請者が主たる担当者となって昨年開催された北海道博物館第2回企画テーマ展「鶴」において、研究成果の一部が展示された。

以上の点から、本論文は十分な学問的価値を有するものと認められる。もちろん、審査の過程でいくつかの問題点も指摘された。たとえば、新田開発はツルの渡来地拡大につながったとしているが、これは人為的に作られた分布であり、本研究で明らかにしたいツルの「歴史的」な生息実態であるとは言い難く、「歴史的」分布とは何を意味するのか不明確である。また、季節移動を検討する際、種ごとではなくツル類全般として検討したこと、および調査で入手した史料は主に近世に関する翻刻史料であり、手稿史料の閲覧がまだ十分にできておらず、更なる検討の余地が残されていることなどが指摘された。しかし、これらは申請者がすでに認識しており、調査が今後進むことで解決できるものであり、本論文の成果を損なうものではないと判断される。

以上の審査結果に基づき、本委員会は全員一致して、久井貴世氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。